# 学級づくりにおける教師の動機づけに対する説明方略の影響

山　脇　眞　弓

## 1．はじめに

日本の学級集団の研究をしている河村（2010）は、「1990年代から、不登校問題の深刻化に加え、学級崩壊の問題が表面化し、学級集団では、一部の児童生徒が、学級集団に適応できないという問題だけでなく、学級集団そのものの確立が、難しい問題を抱えるようになってきた。」「学級の児童生徒の人間関係の形成をファシリテート（促進する）していく力量、それに基づく学級集団づくりの力量は、これからの教師の指導力の中の大きな比重を占めると思われる。」など教育現場では、日々多忙な仕事量の中で「学級づくり」に多くの教師が悩みを抱えていることを示唆している。

日本の学級集団制度の在り方について、河村（2010）は「学級集団は、子どもたちにとっての社会であり、そこで生活や活動をお通して、子どもたちに知識や社会性、対人関係能力、道徳意識を、総合的に身につけさせようというのが日本の学校教育の原理と言えるだろう」と述べている。さらに、日本の学校教育は、「メンバーが固定された学級集団で、生活や様々な活動、授業に取り組むという制度と、教師がガイダンス・生徒指導を総合的に指導するという制度を併せもっている」と河村（2010）は指摘している。この点に日本の教育システムの難しさがあるのではないだろうか。

したがって、日本の学校教育は、アメリカや欧米諸国に比べ、各プロフェッショナルによる役割分担され、教師は授業や学習面のみを教育するのではなく、教師が、学校教育全般を担っていることから、教師個人に対する仕事内容や仕事量は膨大であり、そのため大変多忙な状況下で教育活動を行っているという現状がある。このことは、学校教育をしたものでないと実感はできないことが問題なのではないだろうか。

## 2．養護教諭が捉えた諸問題

学校現場にいる養護教諭は、職務上、他の教師とは児童生徒を見る視点が異なっているといえるだろう。各学校に１名程度（二人制や大規模校を除き、）配属され、保健室という特別な教室を持ち、学校全体の様子を客観的に見渡せる立場で勤務に当たっている。

養護教諭に与えられる保健室は、学校生活や学級集団の中で、心身に問題や不安を抱えている児童生徒が「いつでも、誰でも、一人でも、自由に訪れることができ、ひと息つける安全な場所」である。

例えば、学力不振で悩んでいる児童生徒、家庭環境や親子関係で悩んでいる児童生徒、部活動や友達関係で悩んでいる児童生徒、将来や進路先が見えないで悩んでいる児童生徒、心の問題や悩みを抱えている児童生徒など、多種多様な理由や課題を抱えて逃げ場を求めている児童生徒の駆け込み寺のような場所でもある。

筆者は、公立の小・中学校の養護教諭として、児童生徒たちの様子を長い間みつめてきた。そこで感じていたことは、学校内で発生している多くの事象や問題は、ことの善悪はしっかりと判断されるが、その解決方法には教師の長年の経験値や感による判断が多い。それゆえ問題を具体的に可視化することが少なく、客観的なデータや資料に基づいた判断は、社会的に見て少ないように感じる。

そこで、児童生徒の様子をより詳しく理解し対処するための資料が必要ではないかと思われる。

学校全体や学級の様子、さらに個人の様子まで、詳細に確認できるものがあれば、教師も個人の経験値を活かし、その資料も参考にすることで、教師が日常的に感じている「何となくおかしい子どもの様子」がより明確に理解できる。そのための具体的な手立てと対応が的確に行える、実践的証

拠に基づいた調査票を探していたのである。

## 2．Q－Uとの出会い

2005年に勤務していた公立学校は、市内でも教育課題が山積した中学校だった。

教育の立て直しと、生徒をどのように成長・発達させるかは、学校全体の課題であり、各学年は生徒の実態に合わせて独自の課題遂行のために企画、運営、実践をしていた。

学校の実態から、教師集団は他の公立学校に比べ人数に加配があり、教育の立て直しや生徒対応のために、市内でも優秀な教師が集められていた。

筆者は養護教諭として、新一年生から教育現場の再構築のためのプロジェクトにも積極的に参加することになった。

具体的には、地域教育や行政も巻き込む行事を実施し、近隣の保育所や小学校とも協賛し子育て支援活動を中学生に体験的に学習させるなど、地域活動や行事を通して生徒が自ら変容できるように働きかけた結果、日常生活はずいぶん変化してきたが、本質的な個人の状況や課題、問題点などは表面化しないため掴むことができなかった。

そこで、Q-U アンケート調査を活用することで生徒の様子を可視化することにした。当時は hyper Q-U は開発されていなかったので、Q-U アンケート調査のみ実施した。

## 3．Q－Uとは

早稲田大学　教授　河村茂雄氏が考案し「教育実践に活かせる研究、研究成果に基づく知見の発信」をモットーに３つの理念から研究活動が行われている。

【3 つの理念とは】

①子どもの視点に立つ

教育実践を児童生徒（学ぶ者）の視点でとらえ、教育実践をより向上させるための知見を発信していきたい。

②日本の教育制度に合ったやり方で

学級集団を活用して、教育効果を高める方法論を提案していきたい。

③根拠に基づいた教育を推進する

実践的証拠に基づいた教育実践（Evidence-Based Educational Practice）を推進していきたい。

（2015）

このよう内容について一部紹介する。

Q-U（QUESTIONNNAIRE - UTILITES）とは、①学級満足度尺度：居心地の良いクラスにするためのアンケートと②学校生活意欲尺度：やる気のあるクラスをつくるためのアンケートから構成されている。

hyper - Q-U （hyper- QUESTIONNNAIRE - UTILITES）とは、①学級満足度尺度と②学校生活意欲尺度に、③ソーシャルスキル尺度：ふだん（日常）の行動をふりかえるアンケートから構成されている。

河村氏が2005から2006年に大規模な調査を実施し開発したこれらのアンケート調査は、以下のように構成されている。

**ⅰ．Q-U の基本的理解**

**ⅱ．Q-U、hyper-Q-U の特徴**

**ⅲ．Q-U、hyper-Q-U データ結果の解釈とその活用**

・アンケート調査は15分程度で、児童生徒に一斉に実施できる。

・「個人」「学級集団」「学級集団と個人の関係」の３つの側面を把握できる。

・アンケート結果がデータ化され、さらにグラフ化され、関係性が理解しやすい。

・データ結果を前回と今回で比較・検討することができる。

・データ結果を基に、次回までに行った教育実践の効果を２回目のアンケート結果から確認できる。

・学級集団の分類は標準化された尺度である「学級集団アセスメント Q-U」であり、妥当性をみることができる。

（Q-U, hyper Q-U を総称して以下 Q-U とする。）

①学級満足度尺度（いごこちのよいクラスにするためのアンケート）

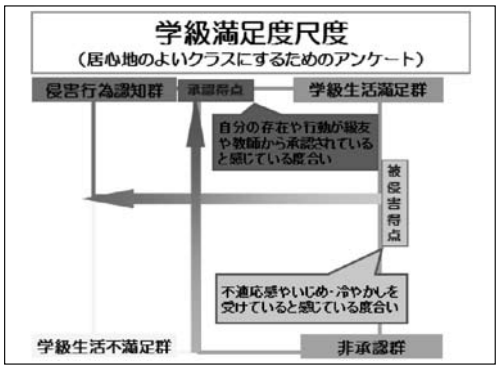


図　1

②学校生活意欲尺度（やる気のあるクラスをつくるためのアンケート）

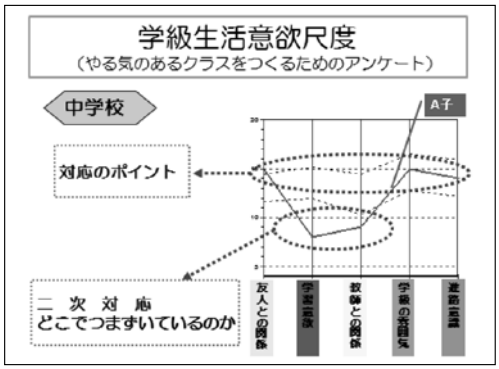


図　2

③ソーシャルスキル尺度
（日常の行動を振り返るアンケート）

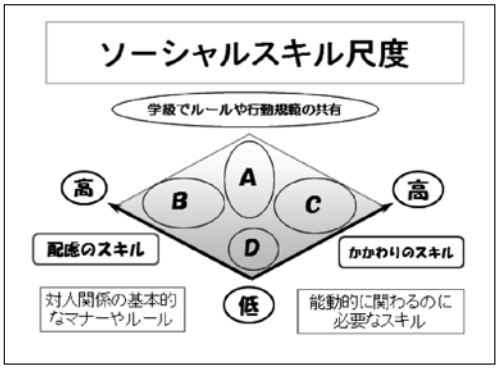


図　3

## 4．講師活動開始

2011 年　早稲田大学河村茂雄氏が主宰する「Q-U リーダー研修セミナー」を受講する機会を得て講師として登録され、Q-U を活用した学校へ講師として訪問するようになった。

講師活動は、特に東海地区を中心に、福岡県内、中国地方など広範囲ではあり、依頼があれば日程と時間が折り合う限り「全国どこにでも行きます」をモットーとして依頼に応じている。

最近では、思春期や青年期の子どもたちの陰惨な事件や、諸問題から自殺や死につながるケースも報道されているため、積極的に Q-U を取り入れている学校もあり、全市的に行っている市もあるため依頼も多く、年間 30 校以上の小・中・高等学校、教育委員会等の研修会に出向き、講師活動を行っている。

## 5．各研修会

講師内容は、河村氏の理論の基礎・基本を踏まえたものとし、受講する教師がより理解しやすいように、細かく課題を分析し説明をしている。

各研修会で学校の担当者から求められることは、

・Q-U のアンケート調査を実施したけれど、どう活用の仕方が分からない
・Q-U のデータの読み方が分からない
・学級経営への活かし方が分からない
・データ結果を学級に活用する方法を分かりやすく説明して欲しい

など、アンケート調査を実施したが、その結果の見方・活用の仕方が分からないということが主な依頼内容である。

### ○教師が抱えている課題と期待

研修会では、「Q-U のデータ結果を理解し、どのようの学級経営に取り入れるか」について基本的な理解の説明になる。

児童生徒のアンケート調査結果から解釈の仕方、個人や集団の問題点の確認、今後、学級経営にどのように活かすかなど、問題点の解説と今後の活用の仕方などでワンクールとしている。

毎回の研修会で確認していることは、小・中・高等学校など学校種の異なる教師が Q-U データ結果からどれくらい、児童生徒の個人の様子をより深く理解できるかである。さらにこの時間に深く理解できたことを今後の学級づくりやクラス経

営にいかに反映できるかでもある。

さらに、学級の実態、学年の実態、学校の実態、教師の自身の指導スタイルなどなど、学校現場の教師がより具体的にわかるような内容も織り込みながら、参加者が満足できるような構成で、意欲に繋がるようにと考えながら説明し、机間巡視をしながら受講者の様子を確認している。

**○受講者のパターン**

校内研修会や教育委員会主催の研修会の講師を通して、受講している教師には大きく分けて二つのパターンがあるように思われる。

**①自主的に参加した集団**

この集団は、学校現場で実際にQ-Uを実践している学校や教師が中心に集まっている研修会である。

**②学校行事として参加している集団**

この集団は、トップダウン式に学校現場にQ-Uを取り入れ実施したため、教師集団にやらされ感が強く、研修会に参加している教師は、仕方なく参加しているという雰囲気が漂う研修会である。

①の集団は、学びたいという意識の中で研修が行われるので、参加者に意欲や熱意、勢いなどが感じられ、研修内で行う活動も積極的に参加している様子が見える。そのため講師も研修に熱が入り、持ち時間が瞬く間に過ぎてしまうようにさえ感じられ、終了時に達成感を覚え、次回の講話内容を構成や準備をする際に、新たな意欲や構想が広がり準備にも熱がはいる。

②集団は、多くの教師にやらされ感や不信感を抱いている様子がみられ、講話の各場面で、積極的な参加の意思が弱く、意欲にも欠ける。

このような集団には、講話開始後、参加者の様子を細かく把握し、講話の中に活動的な手法を取り入れることで、研修を飽きさせないようにしている。さらにより深く理解してほしいことは、強調し、丁寧に解説するなど些細なことではあるが工夫を重ねている。しかしながら、参加者の様子を観て限界を感じることもある。

毎回、研修会終了時に思うことは、この研修会の目的は、現場の教師が学級や集団をどれだけ詳しく理解したいと考えているかである。教師が考える学級集団づくりを手助けする一方法として、提案できることが私の講師としての役目だと思っているが、うまく伝わったか心配になることもある。

## 6．理解を深めるための講話の工夫

今までの講義の組み立ては、視聴覚教材の活用と短時間の演習である。

①説明内容は、power pointを利用する。
②講話の画面は、見やすいようにアニメーションを活用する。
③説明用資料は、カラー印刷で配布する。
④教師参加型のワークシートを使用する。など、Q-Uの基本的理解は、口頭説明では、わかりにくいこともあるので、視覚に訴える方法で行っている。

講話の内容をpower pointにまとめて説明を行っているのは、長しのぶ氏が考案した方法で、その資料を基本に筆者が手を加えオリジナルなものを作成したものである。内容の構成は、各担任と同様のデータ結果を使用し、画面上で読み取り方を説明し、教師の手元にある数枚のデータ結果を理解しやすいようにピンポイントで説明している。

学校では、教師の手元に届いたデータ結果をゆっくり見る時間的余裕がないので、さっと目を通している程度である。

その点を考慮して、画面上はカラーで分かりやすく提示し、文字も少なく、視聴していて興味がわくように作成している。随所にアニメーションを追加し、画面を追っていくと、次に説明がつながるような、連続性のあるものにしている。

ここでの工夫は、視聴時の画面が多様に変化することで、説明が分かりやすく確認できるようになっている。画面と説明が連動していることで、その都度受講者の反応を見ることができることから理解の度合いが確認でき、反応に応じて微妙に内容の増減を加減しながら説明できるという利点がある。

配布資料は、power pointの内容を配布資料に加工したものである。Q-Uの基本内容を抜粋したものとは、power pointと同様の内容をカラーコ

ピーにしているので、研修後に振り返るときに記憶に誤差が出ないように、色分けし、内容をキーワードのように画面上でちりばめ、振り返りを容易にできるように工夫している。

教師の自己診断は、教師の教育スタイルが学級集団づくりに多少影響があることを理解するために使用している。さらに、座学の講義が長時間続くと意識や意欲が低迷することを考慮し、活動を取り入れるように構成している。

研修会後は、学級のデータ結果を担任や学年担当が常に閲覧でき、児童生徒の様子や学級の状態を把握できることが有効活用に繋がると考えているが、多くの場合、各学校では、Q-U は教師の手元には置かれておらず、個人情報を守るという理由から学校内の安全な場所に保管される。

安全な場所に保管することは質問紙の性格上、妥当な方法だと思うが残念である。

毎回行う講話後に感じたいたことは、講話の組み立てがこの方法でよいかということである。なぜならば現在の方法は、一時的に教師の興味を引くことはできるが、その後の活用に繋がっていないように感じることがある。その理由の大半は、は、毎年または隔年ごとに同じ学校から講師依頼を受けることがある。その都度、担当の教師から「基礎の基礎からやってください。」「年に１度しか先生のお話を聞く機会がないので、同じお話でもう一度お願いします。」「教員の入れ替わりや、若い先生が多いので最初からお願いします。」などである。このような学校の現状にこたえるために、毎回 power point や配布資料に少し工夫をして、オリジナルな説明も加えて実施しているが、定着しているように感じないことも多くある。

## ７．仮　説

「講師が学級づくりの説明スタイルを自由座席の講師主導型から、学年群の固定座席で活動中心型に変更することによって、教師が積極的に学級づくりに取り組む意欲につながる」

仮説を実証するため講師自身の意識の改革として、以下の考えに基づく方略を構想し実践することにした。

### （ア）指導者の思考の変革

この変更に関しては、大学の授業を深化させるために話題となっている「ディープ・アクティブラーニングの理論」を参考にしたのである。

大学教育における「教育から学習への転換」の鍵としアクティブラーニングに注目が集まっていると松下（2015）は述べている。

アクティブラーニングとは「学生にある物事を行わせ､行っていることについて考えさせること」と定義し、ハーバード大学　エリック・マズール（Eric・Mazur）は、「テレビでマラソンをみているだけではマラソンランナーになれないと同じように、科学でも教師がやっているのを見ているだけではなく、科学する【doing science】思考プロセスを経験しなければならない」と言っている。さらに溝上（2008）は、アクティブラーニングとは「一方的な知的伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く、話す、発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義している。

### （イ）教師への動機づけ

これらの理論を筆者自身の今までの講師スタイルに当てはめてみると、問題点が見えてくる。

つまり受講者へ説明ありきの一方的な知識伝達が主であり、受講者は受動的でほとんど座学の説明に終始していたことにある。

そこで改善方法として、以下のことが考えた。

（ア）自由席から固定席へ：学年ごとのグループで席を設定する。

（イ）意識の共有化：データ結果を学年全員の教員で見る。

（ウ）離席自由：興味のあるクラスの様子を、各自が自由に見学し､その場で意見交換を行う。

（エ）データ結果の関連づけ：説明時に各データ結果の関連を確認し、データ内に書き込み作業を入れ、データ結果を可視化する。

（オ）教師の思いこみと事実確認：データ結果の数値と､教師が行う日常観察情報を関連づけ、教師相互に事実確認をする。

（カ）データ結果を真摯に受け止める：児童生徒の訴えに気づく。
（キ）教師の指導スタイルの確認：自己の指導スタイルの特徴に気づく。
（ク）新たな手立て：次回、アンケート調査を実施するまでの間に行う具体的な対策を考え、実践・実行課題に結びつける。
（ケ）学年集団や教師集団、学校全体で情報交換を積極的に行う。

このような視点で、教師自身が能動的な動きができるように考慮し、積極的に取り入れ講話を行うことにした。

## 8．実態調査

2015年に講師で訪問した学校に講話後の感想を自由記述式で依頼した。

調査対象は183人で、A・B・C県内小学校の教師116人とA・B・C県内中学校の教師67人に実施した。調査対象校は、小学校7校と中学校6校にお願いした。調査期間は、2015年の6月から8月の間に講師を行った学校に依頼した。調査方法は自由記述式の感想文A4 サイズ1枚で、講話終了後記載するようにお願いした。調査回答数は、自由記述で複数回答から44項目に分類した。回答者数は、延べ回答者数は606人とした。

## 9．結　果

自由記述の感想を以下のように項目から平均値による比較分析を行った。

**○状況把握（客観的）37.02%**

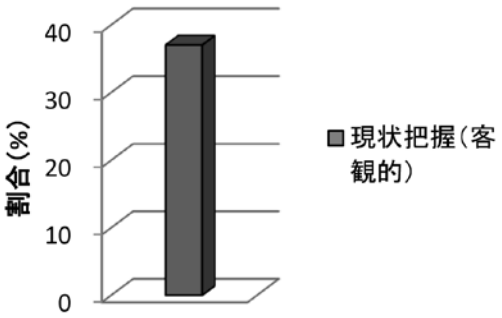


図　4

状況把握の具体的な内容は、・自分のクラスの状態･特徴が分かった･データ結果の見方が分かった・生徒一人ひとりの様子や考えていることが分かった・担任がグループの状態を観察する視点ができた・学校や学年のパーセントから全体の課題が分かった。などの意見が記載されていた。

**○未来志向　18.51%**

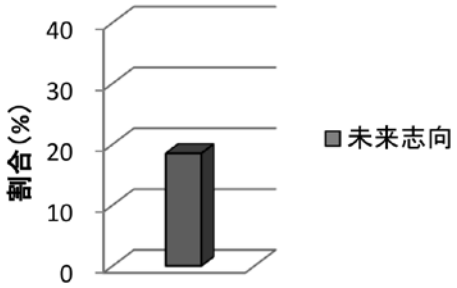


図　5

未来志向の具体的な内容は、・今後の学級経営に活かしたい・クラス経営・学級づくりの参考にしたい・結果を見て、生徒指導に生かしたい・学年全体で取り組んでいきたい・全職員で生徒に働きかけたい・学校全体で取り組んでいきたい・今の課題の打開策が見つかった、などの意見が記載されていた。

**○講師説明（P）19.01%**

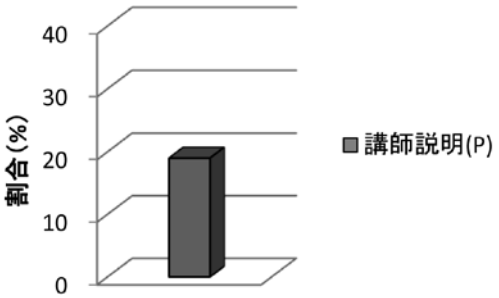


図　6

講師説明でよかった点の具体的な内容は、・講師の説明が的確だった・説明が分かりやすかっ・質問紙に答えるだけで、ここまで分析できることに感心した・Q-Uは良い資料だと思うなどの意見が記載されていた。

**○気づき　12.23%**

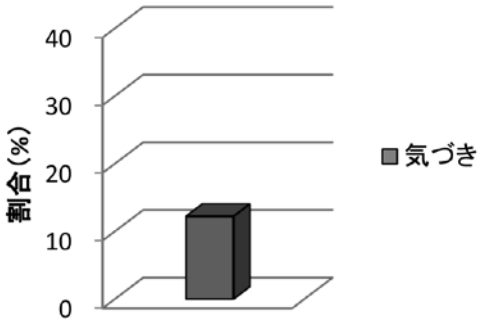


図　7

気づきの具体的な内容は、・生徒へ支援するヒントが分かった・原因や状況を分析することの必要性が分かった・自分で把握してないことに気づき、とても参考になった・教師として自分自身の特徴が分かった・子どもへの対応の仕方が分かった・担任として生徒の様子を観ることの大切さや責任を感じた・教師として自分ができていないところを納得した、などの意見が記載されていた。

**○講師説明（N）4.13%**

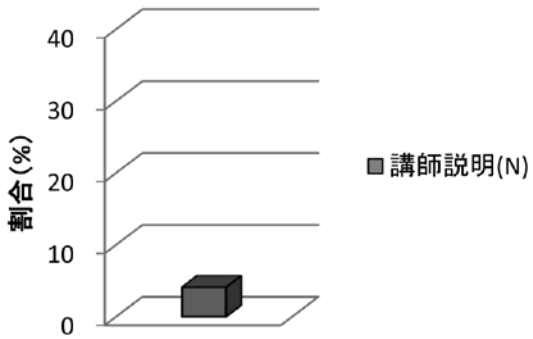


図　8

講師説明で悪かった点の具体的な内容は、・説明時間が足りなかったので,もっとゆっくりクラスの状態をみたかった・教師の性格と集団との関係がよくわからなかった・理解するための作業が多すぎる・理解するのは難しいと思った・書き込みすぎて、結果表が見にくくなった・クラスごとに説明やアドバイスをしてほしい、などの意見が記載されていた。

**○実施方法　0.83%**

図　9

実施方法については・実施時期はいつがよいのだろうかという疑問点も上がっていた。

## 10. 考察とまとめ

自由記述のアンケートを述べ回答数から平均値で示すと、上位 6 位が以下のような結果となった。

| | | |
|---|---|---|
| 1 位 | 状況把握（客観的） | 37.02% |
| 2 位 | 講師説明（P） | 19.01% |
| 3 位 | 未来志向 | 18.51% |
| 4 位 | 気づき | 12.23% |
| 5 位 | 講師説明（N） | 4.13% |
| 6 位 | 実施方法 | 0.83% |

表　1

1 位「現状把握」では、データ結果から、客観的に自分のクラスをみることができたと感じた教師が37.02%である。児童生徒の実態や学級の様子、学年や学校全体の様子を教師の思い込みや感覚ではなく、数値に置き換えることが教師の思いだけでなく、客観的に児童生徒の様子がより深く理解でき、現状をより理解させ、納得させることに繋がったと考えられる。

2 位「講師の説明（P)」では、今回、工夫した説明方法が教師に的確だったことや、説明が分かりやすかったことが挙げられている。改善前の座学で受動的な方法から活動型に変更したことや、グループ分けをして会話型を取り入れたことから、受講した教師が話題を共有でき、各学級に興味や関心を持つことができ、さらに理解を深めることに繋げることができたと思われる。その結果、学年や学級が今後考えるべき点を共通理解で

き、更なる意欲へと変化したのではないかと思われる。

３位「未来志向」では、データ結果を基に、学級や児童生徒の個人の様子がより具体的に理解でき、さらに個人の期待感や目標を明確に確認できたことから、今後の学級経営に生かしていける方法が確認できた。さらに自分のクラスの現状と特徴が分かったことで策を講じる手立てもできたのである。

多くの教師が各学級の状況を察知することが困難だと考えていたが､多くの教師が関わることで、全員で意見交換を行い把握できることが利点となり、その中で自分の学級の現状と課題が分かり、担任として安心できた面や具体策も見えてきたと考えられる。そこで次学期からの活動目標も見えてくるので、行動目標が立てられ、期待も持てるようになり、やる気に繋がっていったのではないかと思われる。

４位は､「気づき」で、データ結果を読むことにより、児童生徒へ個別支援のヒントや児童生徒の個人の状況が分かり、現在、彼らがとっている行動の原因や要因を把握することができた。今まで混沌としていたことが、どのように解釈すればよいか、分析もできたと思われる。

アンケートの必要性と、その正確さや客観的なデータ結果の素晴らしさを理解することができたと考えられる。教師自身が把握できなかったことを、可視化したことで、新たな手立てへと繋げることができた。

教師が自己の特性に気づき、その特性が学級経営や学級づくりにも影響することを認識できたことも、今後の学級づくりや学級経営に活かせるだろう。

教師として自分ができていないところを客観的に確認できたことは、今後の学級経営の課題を具体的に提示されたと自覚したのではないだろうか。

５位の講師説明（N）は、講話時間が短かったという意見がある。

講話時間は、学校から提示されるもので、各学校から依頼される時間は、約60分で指定される学校が多い。これは、学校の授業時間数や行事の関係、会議時間の設定など学校現場が多忙な中での研修時間を捻出しているためだろう。

講師としては、データ結果に沿った内容を手順良く説明するには、やはり60分間では説明だけで終わるので、活動や作業を入れるためには、90分をお願いするが、返答は60分でお願いしたいというのが現状である。実際に研修会で講話を始めると、途中を省く、活動時間を短時間に削減するようになるため、研修会終了後に、「もう少し時間に余裕が欲しかった。」「活動をゆっくりやりたかった。」「講師の話をもっと聞きたかった。」という感想が記載されていたことから、時間設定に余裕を持たせるために講話時間の拡張をお願いすることが必要となるだろう。これは依頼校の担当者へ、今後の提案事項にもなるだろう。

今後の工夫点としては、少数意見として記載されていた「理解するための作業が多すぎる」､「理解するのは難しいと思った」といった意見があり、活動と説明をすることで、その作業についていけない教師がいることもわかった。「特別支援の子は、問題の理解度が低いのでアンケート調査の内容に答えられなかった」「特別支援の子への対応が分からない」この意見は特別支援の児童生徒の対応であり、この領域まで説明するには、数時間の研修時間を要する内容にもなることから、同時進行することの難しさを筆者も痛感している課題でもあるので考えていきたい。

「昨年は全く活用できていなかった」この意見は実にもったいないと考えている事柄で、説明を聞いても活用できなかった要因がどこにあるか、今後の受講者の課題にもなるだろう。

その他に「担任外の教員へもサンプルが欲しい」といった準備での要望なども記載されていた。

わかりやすく具体的な説明を加え、多くの教師は理解できているが、中にはこのような意見も書かれていた。

「データ結果から疑問に思える子への対応の仕方を知りたい」「クラス会議でQ-Uをいかに活用するか、その方法を知りたい」「クラスごとに説明やアドバイスをしてほしい」など、データ結果から読み取れたことではなく、今すぐ手立てが欲しいということである。このような教師は、自分で考えるより、今すぐ答えが欲しいと思ってい

る。

講師としては、細部まで説明を加え、データ結果から、学級の様子や個人の様子、今後の課題まで手に取るようにより具体的に説明しているのだが、このような思いをもっている教師は、現実を受け入れ自己理解を深めるより、簡潔な方法を求めている。どうして答えだけを求めるのだろうかと不思議に思っていた。

このような現象が特別な教師の発言ではないことに気づいたのは、山内（2015）によると「他人の答えを待つ学生が多くなり、考える前に教えてくださいと回答を求めてくる。」「手厚い学習支援をしすぎて、自律的に学ぶ習慣を失ってしまう」ということである。現在の教師も長年このような教育を受けて大人になり、教師になっている。そうだとすれば、このような反応はごく普通だったと初めてわかった。つまり、考えた後に正解が記載している、教科書の最終に解答ページを掲載した教育を受けてきた結果だろう。

今後は、このような教師に対する対応や方法も考慮しなくてはいけないことに、今回調査から気づくことができた。

今後も多くの学校を訪問し、講師活動を続けていくだろうが、講師の説明の工夫が、受講者の意欲や意識にどのように影響するか、今回の調査から明らかにすることができた。

これらの結果から、本研究の課題であった「講師が学級づくりの説明スタイルを自由座席の講師主導型から、学年群の固定座席で活動中心型に変更することによって、教師が積極的に学級づくりに取り組む意欲につながる」という仮設は実証することができたといえる。

河村氏（2010）は、学級経営について次のように述べている。「学級集団の目的は、集団自体の向上ではなく、所属している子どもたちの発達の促進である。子どもたちは偶然かつ強制的に所属させられている。具体的には、教師という成人をリーダーとし、同年齢の児童生徒によって組織された、閉鎖的集団である。つまり、学校教育の目的が具体的に展開される場が、まさに学級集団なのである。その中で、学年団の情報交換や打ち合わせ、教師が一緒に協力していかなければならない。」これが日本の学校教育の特色である。

各学校で行われている Q-U のアンケート調査は、データ結果が分かりやすく分析され、教師用と本人用に理解しやすいようにコメントもされている。Q-U の基本が理解できているものに対しては、大変わかりやすい資料で活用もしやすいものである。しかしながら、Q-U のデータ結果を見ただけではわかりにくいと感じている教師にとっては、厄介なものだと映るかもしれない。

講師を任されているものとして、自分自身が細部まで理解したうえで、基本を忠実に説明し、受講者がより深く理解することができれば、児童生徒の理解もより深まると思う。

しかしながら学校現場の教師は多くの仕事を抱え、超多忙の中で、日々教育を行っている。

その点を考えると、私のような講師は、今後も学校現場に赴き、Q-U のより深い理解と、今後の学級づくりへのアプローチの仕方を、現場の教師と共に考えていくことが求められていると思われる。

多くの児童生徒のために、今後もこの普及活動を行うために、自己研鑽を重ね、更なる工夫を考えていくことが、私自身の課題であるだろう。

今後の研究の課題としては、今回の自由記述式アンケートの分析から、講話を工夫したことによる教師の反応と分析をすることができた。しかしながら教師の要望はこれからも出てくると考えられる。そこで、アンケート調査を２回目実施する学校で、講話の活動場面で使用できるワークシートの作成も視野に入れ考案していきたい。

## 参考・引用文献

内山乾史　2015　私的経験に基づくアクティブラーニング論 : 神戸大学の研究（その 4）大學教育研究、23:21-41　神戸大学紀要論文

河村茂雄　2010　日本の学級集団と学級経営　図書文化

河村茂雄　2014　学級リーダー育成のゼロ段階　図書文化

河村茂雄　2015　こうすれば学校教育の成果は上がる　図書文化

松下佳代　2015　ディープ・アクティブラーニング　勁草書房

溝上慎一　2008 「自己形成の心理学－他者の森を駆け抜けて自己になる－世界思想社
山脇　眞弓 2007　中学生に対する粘土による表現活動とその効果　北九州市教育委員会　研究論文
山脇　眞弓 2005　地域の教育力を生かした保育体験学習の試み～総合的な学習の時間の充実を目指して～　北九州市教育委員会　研究論文

# The influence of the explanation strategy for the motivation of the teachers in the classroom management

Yamawaki, Mayumi*

Q-U（QUESTIONNNAIRE－UTILITES）の講師として、学校現場に学級づくりや学級経営の仕方について、依頼を受け説明を行っている。講師として説明する内容は、Q-Uの内容を創設者の基礎・基本を踏まえ理解しやすいように、アレンジしている。

講話の内容は，児童生徒のアンケート調査結果を基に、データ結果とQ-Uの基本的な理解、解釈の仕方、今後の学級経営への活用法などである。しかしながら講話後のデータ結果の活用率はあまり上がらないように思われる。そこで、現在の講話スタイルを再考することが、受講者の意欲に繋がるのではないかと考え、新しい講義スタイルを考案し、実施後に受講者へアンケート調査を行い、その結果を考察及び検討したものである。

*キーワード：Q-U　学級づくり　講師活動　教師　児童生徒*

**Nagoya Ryujo Junior College*